

『どことなくなんとなく』 一稚拙な追想

京都大学理学部 4 回生 清水優

あの日の君はどこを歩いていたのか？

高校生になったばかりの君の身体は 二両編成の列車 前の車両まんなかあたりの座席におさま
り 異色短編集の第3巻を閉じ た

…実在感の喪失！

から回る世界 の

枯れたこだまを聴きながら

君は生活している

純粋な持続を見失った情感は

はるか遠く…

君は色彩の乏しい街を歩き 自分の不在を思ったろう？ それは違う そしてももなく

(コギト

エルゴ

スム)

と誰かが呟いた 君は感激しただろうが この言葉はハリ
ボテだ それを見抜けずに君は 君ひとりだけの世界を勇んで歩み始めた

君はむせかえるほどに甘ったるい経験を欲した そのような経験に耐えうる自我を求めた そ
のためには 生に立ち戻るだけでよかった しかしそこには自我は無かった むしろ自我が尽
きることと充実した生は一体であった

*

君はほんとうの土を探さねばならない 歩きながらいろんなことを勉強し そのたびごとに屈
んで足元の土をすくって舐めてみるといい なんだか不健康な味がするだろう

地平の遠く 遠くまで歩いて君は絶望するかもしれないが やがてその粗悪な土をうまく固めて 「それ」をつくるだろう 作り方はいずれ知るはずだ 「それ」で君はどんどん地面を掘って とうとうどうしても太刀打ちできないほど硬い地層にぶつかる

＊

僕？ 僕もまだ掘っている ときどき掘り当てるけれど それもまたすぐに埋もれて見えなくなる もう少しなんだ だから… まあ君もくじけずにやれよ きっといいことがある

★

F先生は実感の抜け落ちた生活の底にまだ見ぬ外的存在の呼吸を聴いた。それは漫画のための単純なアイデアではあるまい、きっと彼がその全人格を震わして予感したことに違いない…。僕も高校生のころに、この話の主人公のようにあらゆる実在感の欠落とつぜん出くわし、わけのわからない真っ黒な空虚がそこらじゅうで口をあけている世界に暮らした。高二のころ試みに友人に相談したがすこし渋い顔をされたのでそれ以降は言わなかった。それは一向にかまわなかった、そもそも自分の話していることは自分にとってさえ、口を離れて刹那に闇のなかへ溶けさるように思えた。

作中の男性が言うように「そのアイデアは君の独創ではない」。いわゆる独我論とか何だとか、そういうものの一種として分類できるつまらないことだと言われるかもしれないが、その説明は僕にとってそもそも何の解決にもならない的外れなことだった。

かつて感銘を受けたデカルトのコギトが、実際は自我について証明していないことに気づいたのは最近になってからだ。自我は、経験とは無関係に、思惟によって後から創作される概念に過ぎなかった。生活の実感が薄れている時、それは自我の意識が越権的に増大し過ぎている時なんだろうと思う。充実した経験の最中にはむしろ自分はあらわれてこない。存在についての積極的な証明は思惟の領分ではなく、もっと直接で単純で、変化に満ちながらも分割のできないような温熱だ。コギトはせめて「そのように単純な経験は経験されるものである」と叫ぶべきだった。

改めて『どことなくなんとなく』を読んで、現実存在について思いを巡らし、さまざまな観念が高校時代の追憶とともに去来した。たしか友人に相談をしたのも、いまのような冬に向かう季節だったと思う。F先生が空虚にとらわれたのもこんなさみしい季節だったんじゃないだろうか、なんて勝手に思い描いたりしている。